

4 市内の注目すべき場所

注目すべき場所については、2013 戦略での選定場所について見直しを行い、自然度や対策の優先度が高いという観点から、自然度の低い地域、また取組みが当該エリアに限らない地域等を対象地から外しました。見直しを行った結果は表 1-4-1 のとおりです。

また、今回新たに、浜松の本来の自然を脅かす危険のある種を「新たな脅威」として選定しました（表 1-4-2 参照）。

表 1-4-1(1) 注目すべき場所

No.	地域名	地域区分	概要
1	中田島砂丘	①遠州灘沿岸砂丘	遠州灘沿岸は海岸保全区域に指定されているほか、保安林と風致地区にも指定されている。大きく発達した砂丘は、アカウミガメの産卵場所のほか、砂丘植生やカラハンミョウ等の海浜性昆虫類といった砂丘に特有の生物の生息生育場所となっている。なお、土砂供給量の減少等により砂丘が縮小しており、アカウミガメの産卵や砂丘植生への影響が懸念される。
2	いかり 釜 瀬干潟	②浜名湖・周浜名湖低地	浜名湖の舞阪湾内の干潟で、県立自然公園に含まれている。浜名湖の浅水域にはアマモやコアモモといった植物がアマモ場を形成し、魚類や甲殻類等の多様な動物の生息場所を形成しているほか、干潟はシギ・チドリ類、カモメ類等鳥類の重要な生息場所となっている。
3	村櫛の干拓地		浜名湖に面した村櫛町の干拓地であり、県立自然公園に含まれている。農地と水路が多く、ヨシゴイ、サギ類、シギ・チドリ類、カモ類等の鳥類の重要な生息場所となっている。
4	都田川河口部の汽水域		浜名湖に流入する都田川河口部とその周辺で、河川と湖内は県立自然公園に含まれている。都田川河口部にはヨシ原が発達し、汽水域に特有のウラギクなどの希少種の局地的な生息生育場所となっている。
5	奥浜名湖の鳥類越冬地及び周辺の樹林		奥浜名湖の引佐細江、猪鼻湖と大崎半島を含んだ範囲であり、県立自然公園に含まれている。水域では、カモ類等の水辺性鳥類の主要な越冬地・生息地となっているほか、大崎半島の樹林ではサギ類のコロニーが見られ、浜名湖や周辺の水田等を利用するサギ類の重要な場所となっている。
6	都田川・井伊谷川と川沿いの水田地帯	都田川と井伊谷川は県立自然公園に含まれている。都田川や井伊谷川沿いにある低地の用水路にはヤリタナゴが局地的に残存し繁殖しているほか、都田川にはスナヤツメの生息地が点在しており、重要な場所となっている。なお、圃場整備等による移動経路の分断や生息環境の変化により、ヤリタナゴ等への影響が懸念される。	
7	天竜川河口と周辺の湿地	③天竜川	タコノアシやヒメシロアサザ等の多くの湿生植物や水生植物が生育し、水域や干潟はカモ類やシギ・チドリ類等の水辺性鳥類、イシカワシラウオ等の魚類、トンボ類等の昆虫類といった動物が生息する重要な場所となっている。
8	天竜川中下流域の水域と砂礫河原		天竜川河口から魚道が設置されている船明ダムを超えて秋葉ダムまでの区間は、天竜川を代表するアユが遡上し分布している。サツキマスは現在では漁協等によって放流されているが、かつては天然分布していた。天竜川の二俣町鹿島付近等にはスナヤツメが生息している。また、下流の砂礫河原は希少種のコアジサシの繁殖地として利用されており、重要な場所となっている。
9	御陣屋川と周辺の湧水群・斜面林	④三方原台地～扇状地	湧水地と湧水が流入する河川であり、周辺の湧水湿地にはサクラバハノキ、河川にはミクリ類の群落やスナヤツメ等の湧水地に特有の動植物が生息生育するなど、市街地化が進んだ地域では重要な場所となっている。なお、市街地化が進んでいる地域であり、今後も土地改変などによる御陣屋川のミクリ群落や周辺の湧水群への影響が懸念される。
10	佐鳴湖周辺の湿地と斜面林		ミカワバイケイソウをはじめとする多くの湿地生植物が生育し、周囲の段丘斜面には樹林が残存しており、市街地化の進んだ地域では動植物の重要な生息生育場所となっている。椎ノ木谷は特別緑地保全地区に指定され、ミカワバイケイソウ等の保全活動が行われている。
11	緑のネットワーク形成エリア		三方原台地から低地にかけての市街地化が進んだ地域であり、都市計画区域に含まれる。段丘斜面等に断片的な樹林が残存しており、そのような緑地をつなぎ、育てていくことが望まれる場所となっている。

表 1-4-1(2) 注目すべき場所

No.	地域名	地域区分	概要
12	雨生山一帯の蛇紋岩地域	⑤引佐丘陵地～低山地	蛇紋岩地域であり、県立自然公園に含まれている。斜面には湿地環境が形成され、湿地にはムラサキミカキグサ等の植物やヒメヒカゲ等の昆虫類、湿地周辺の草地にはキキョウ等の植物が生育し、特有の動植物が局地的に生息生育している重要な場所となっている。
13	竜ヶ石山周辺の石灰岩地域		石灰岩地域であり、鍾乳洞が存在しており、竜ヶ石洞は観光資源として利用されている。キクガシラコウモリ等の洞窟性の動物が生息する重要な場所となっている。なお、石灰岩地域はコンクリートの材料として掘削されやすく、土地改変による影響が懸念される。
14	シブカワツツジ群落		蛇紋岩地域であり、やせた立地には静岡県の固有変種であるシブカワツツジが生育する重要な場所となっている。静岡県天然記念物に指定されている。
15	枯山の里山林		市域におけるギフチョウの限られた生息地である重要な場所であり、浜松市の天然記念物に指定されている。なお、ギフチョウが生息する二次林では林床植生の変化等により、食草であるヒメカンアオイが減少するなど、生息環境の劣化が懸念される。
16	霧山周辺の樹林・ため池		かわな野外活動センターと周辺の樹林地であり、二次林が比較的多く、ため池も見られ、水生植物や両生類、樹林性鳥類等が生息生育する重要な場所となっている。
17	観音山周辺の樹林	蛇紋岩地域であり、やせた立地には静岡県の固有変種であるシブカワツツジが生息するほか、ムササビ、サンバ、サンショウクイ等の主に樹林性の希少種が生息する重要な場所となっている。	
18	龍山のエンシュウシャクナゲ群落	⑥天竜川中流山地	エンシュウシャクナゲ(別名ホソバシャクナゲ)は静岡県と愛知県に分布する植物であり、静岡県では県西部に分布し、尾根筋のやせた立地などに局地的に生育しており、重要な場所である。龍山、浦川ともに静岡県天然記念物(龍山のホソバシャクナゲ群落・浦川のホソバシャクナゲ群落)に指定されている。
19	浦川のエンシュウシャクナゲ群落		
20	竜頭山周辺の樹林		尾根筋のやせた立地などに局地的に生育するエンシュウシャクナゲが生息するほか、ニホンリスやコサメビタキ、ヨタカ等の樹林性の希少種が生息する重要な場所となっている。
21	京丸のアカヤシオ・シロヤシオ群落	⑦北部山地自然林	岩岳山山頂の岩場に群生するアカヤシオとシロヤシオが生息する群落。樹齢100～300年前後といわれており、古木の群生地は希少であり、重要な場所となっている。国の天然記念物に指定されている。
22	白倉原生林		白倉川南岸の国有林であり、冷温帯から亜高山帯の自然度の高い森林が広がる場所であり、重要な場所となっている。
23	亜高山地域		国有林であり、亜高山から高山帯にかけての自然度の高い植生が分布する。市域においては分布が限られた重要な場所となっている。ニホンジカの食害等の影響が懸念される。

表 1-4-2 新たな脅威

No.	対象種	地域区分	概要
1	アライグマ	市内全域	既に一定の個体数が生息していると考えられている三ヶ日町や引佐町から、市内各地に生息域を広げることが懸念されている。
2	クリハラリス		既に生息が確認されている市街地から、市北部の山地まで生息域を広げる可能性があり、在来のニホンリスへの影響が懸念されている。
3	ヌートリア		浜名湖周辺で捕獲、目撃がされている。その他の地域の生息状況は不明ではあるが、水域をたどって今後生息域を広げる可能性がある。

5 浜松市の指標種

モニタリングなどの指標となる「指標種」の選定の視点は以下のとおりです。

- 【a】《環境特性を指標》 特定の生息生育条件との結びつきが強いなど、生態系や自然環境を評価する上で効果的と考えられる種。
- 【b】《生態系を代表》 その種の生息に、多くの生物の生息や広い面積を必要とする生態系の上位種。かつ、その種の保全によって生態系を構成するその他の種の保全につながる種(アンブレラ種)。
- 【c】《市民による取組み促進》 市民が親しみを感じ、識別が容易で、市を代表する種。また、多くの市民や事業者の取組みを促せる種(シンボル種)。なお、公表することで乱獲などの弊害が生じるおそれがない種。

表 1-5-1(1) 指標種など

地域区分	主な環境タイプ	選定した種等	選定の視点			生態等	指標・保全へのつながり
			a	b	c		
①遠州灘沿岸砂丘	砂丘	植物：砂丘植生	○			・砂丘環境に対応した特有の生態をもつ(特殊環境の植生) ・立地の安定化、踏圧等による影響を受ける ・全国的にも減少	・良好な砂浜環境を指標する
		爬虫類： アカウミガメ	○		○	・海洋に生息し、5～8月に砂浜で産卵する ・回帰性が強い ・遠州灘を特徴づける種(行動) ・市のシンボリック的存在	・良好な砂浜環境を指標する
②浜名湖・周浜名湖低地	汽水域	植物：アマモ場	○		○	・汽水の浅水域を代表する沈水植物 ・多様な魚介類の生息場所を形成する	・良好な湖岸汽水域の環境を指標する ・多様な魚介類の生息場所の保全につながる
		植物：ウラギク	○			・汽水域の干潟等塩分のある湿地という特殊な立地に生育する草本類 ・8～11月に開花する	・良好な干潟環境を指標する
		鳥類： シギ・チドリ類	○			・多くの種が旅鳥で、渡りの中継地として干潟を利用し、良好な干潟環境を生息地とする	・良好な干潟環境を指標する
	湖岸のヨシ帯	植物：ヨシ(ヨシ原)	○		○	・汽水や湖沼等に成立するヨシが優占する草本群落 ・湖岸の多様な動物の生息基盤となる ・市民による識別が容易	・湖岸や河口域の多様な動物の生息環境を指標する ・希少種の生息環境の保全につながる
		昆虫類： ヒヌマイトトンボ	○			・汽水域のヨシ原の特に海水の影響がある環境に生息し、ある程度まとまった広さを持つヨシ原を生息地とする	・良好な汽水のヨシ原を指標する
	鳥類：オオヨシキリ	○		○	・広がりを持ったヨシ原を繁殖地として利用する	・良好なヨシ原を指標する	

選定の視点 a. 環境特性を指標する b. 生態系を代表する c. 市民による取組みを促す

表 1-5-1(2) 指標種など

地域区分	主な環境タイプ	選定した種等	選定の視点			生態等	指標・保全へのつながり
			a	b	c		
②浜名湖・周浜名湖低地	水田・農業用水路	魚類：ヤリタナゴ	○			<ul style="list-style-type: none"> ・細流や用水路等のやや流れのある水域に生息する ・マツカサガイ等の二枚貝に産卵する 	<ul style="list-style-type: none"> ・用水路と河川、水田等の水域の連続性、貝類の生息など、良好な水域環境を指標する
	湖岸～農地～森林	鳥類：ハヤブサ		○		<ul style="list-style-type: none"> ・小～中型鳥類を主な餌とする ・断崖等に営巣する ・餌となるカモ類等の鳥類が多い農地から里山に生息する 	<ul style="list-style-type: none"> ・餌資源の豊富さを指標する
③天竜川	河川水域	魚類：カマキリ(アユカケ)	○			<ul style="list-style-type: none"> ・降下回遊魚で繁殖は河口や海で行う ・早春にごく若い未成魚が河口を溯上し、下流域から中流域の上部までさかのぼって広く生息する ・回遊魚であり、天竜川の水域のつながり(連続性)が生息範囲を限定する 	<ul style="list-style-type: none"> ・河川水域の連続性を指標する。
		魚類：イシカワシラウオ	○			<ul style="list-style-type: none"> ・県内では、天竜川河口を中心とする遠州灘个体群と大井川河口を中心とする駿河湾个体群が知られている ・河口近くの浅瀬で産卵する ・生息場所は河口近く沿岸の波砕帯であり、海水温が上昇する夏季には比較的低温の河川にも進入する ・ほぼ完全な周縁魚であり、天竜川の河口域を代表する魚類 	<ul style="list-style-type: none"> ・大河川河口域の水域環境を指標する
	砂礫河原	植物：カワラハハコ	○			<ul style="list-style-type: none"> ・かく乱をうける砂礫河原に特徴的に生育する ・河川の特立立地に生育する種 	<ul style="list-style-type: none"> ・一定のかく乱をうける砂礫河原を指標する
	河畔林	昆虫類：コムラサキ	○		○	<ul style="list-style-type: none"> ・幼虫はヤナギ類を食べ、幼虫で越冬する ・平地では年3回発生する。成虫は樹液に集まる ・河川の中下流部のヤナギ林に多く見られる ・河川敷のヤナギ林に生息する 	<ul style="list-style-type: none"> ・河川の樹林環境を指標する
	河口部	鳥類：シギ・チドリ類	○			<ul style="list-style-type: none"> ・多くの種が旅鳥で、渡りの中継地として干潟を利用する ・貝類や甲殻類等を餌とする ・餌資源が豊富な干潟環境を生息地とする 	<ul style="list-style-type: none"> ・良好な干潟環境を指標する
	水域～河畔	鳥類：ハヤブサ		○		<ul style="list-style-type: none"> ・小～中型鳥類を主な餌とする ・断崖等に営巣する 	<ul style="list-style-type: none"> ・餌資源の豊富さを指標する
④三方原台地～扇状地	樹林	鳥類：キツツキ類(コゲラ、アオゲラ、アカゲラ)	○		○	<ul style="list-style-type: none"> ・主に森林に生息する留鳥 ・昆虫類や木の実を餌とし、枯木等に巣穴を掘り営巣する ・樹林地を利用する鳥類 	<ul style="list-style-type: none"> ・樹林の発達段階や連続性、餌となる昆虫類の状況を指標する
	河川	魚類：ホトケドジョウ	○			<ul style="list-style-type: none"> ・湧水や山裾の斜面から浸み出した水が集まる、汚れの少ない緩やかな流れの小川等に生息する ・良好な水質や水量が維持されている小河川や細流に生息する 	<ul style="list-style-type: none"> ・良好な小河川や細流、水量や水質を維持している森林環境等を指標する
		植物：ミクリ類	○			<ul style="list-style-type: none"> ・池沼等の止水や河川の流水環境に生育する抽水植物 ・良好な水質や水量が維持されている小河川や細流に生息する 	<ul style="list-style-type: none"> ・良好な河川環境を指標する

選定の視点 a. 環境特性を指標する b. 生態系を代表する c. 市民による取組みを促す

表 1-5-1(3) 指標種など

地域区分	主な環境タイプ	選定した種等	選定の視点			生態等	指標・保全へのつながり
			a	b	c		
④三方原台地～扇状地	ため池	昆虫類：トンボ類	○		○	<ul style="list-style-type: none"> ・幼虫期は水中に生息し水生生物を餌とし、成虫は昆虫類を餌とする ・生息環境は種によって異なる ・抽水植物や隣接樹林の有無等により生息する種が異なる 	・多様な水辺環境の存在を指標する
	樹林～農地	鳥類：サシバ		○		<ul style="list-style-type: none"> ・夏鳥で、両生類や昆虫類を餌とし、周辺の主に針葉樹に営巣する ・カエル類等の餌が豊富な里山環境に生息する 	・餌場環境と隣接する営巣環境がセットで存在することを指標する
	樹林～農地	植物： ミカワバイケイソウ	○		○	<ul style="list-style-type: none"> ・低地の湿原に生育する多年草 ・東海地方に特有(東海丘陵要素植物) ・市民による識別が容易 	・良好な湿地環境を指標する
⑤引佐丘陵地～低山地	コナラ林	昆虫類：ギフチョウ	○		○	<ul style="list-style-type: none"> ・成虫は早春に羽化しスミレ類等で吸密する ・幼虫はカンアオイ類を食草とする ・里山を代表するチョウ類であり、幼虫の餌となるカンアオイ類と成虫の吸密植物の生育が生息条件となる 	・良好な雑木林(二次林)を指標する
	中小河川・細流	魚類： ナガレホトケドジョウ	○		○	<ul style="list-style-type: none"> ・主に標高の高くない山地の河川上流域に生息し、源流近くの、浅くて流れの緩やかな細流に多い ・台地の裾や丘陵地の川では見つからない ・水量や水質が維持されている小河川や細流に生息する。 	・良好な小河川や細流、水量や水質を維持している森林環境等を指標する
		昆虫類： ゲンジボタル	○		○	<ul style="list-style-type: none"> ・幼虫は小河川や水路等の水中に生息する ・幼虫はカワニナ等の貝類を餌とする ・水辺の土中でさなぎになる ・ある程度有機物が含まれる水域に生息する ・市民による識別が容易 	・水質が比較的良好であり、コンクリート化されていない流水域を指標する
	ため池	昆虫類：トンボ類	○		○	<ul style="list-style-type: none"> ・幼虫期は水中に生息し水生生物を餌とし、成虫は昆虫類を餌とする ・生息環境は種によって異なる ・抽水植物や隣接樹林の有無等により生息する種が異なる。 	・多様な水辺環境の存在を指標する
	石灰岩地の洞窟	哺乳類：コウモリ類	○			<ul style="list-style-type: none"> ・夜間活動し、昆虫類を餌とする ・洞窟や樹洞等の特殊環境を生息地、繁殖地とする ・キクガシラコウモリ等の希少種 	・特殊環境の維持と、餌資源の存在を指標する
	蛇紋岩地の湿地・周辺草地	植物： ムラサキミミカグサ	○			<ul style="list-style-type: none"> ・湿地に生育する小型の多年草 ・特異な環境に生育する 	・良好な湿地環境を指標する
		植物：キキョウ	○			<ul style="list-style-type: none"> ・草地に生育する多年草 ・特異な環境に生育する 	・良好な湿地環境を指標する
樹林～農地	鳥類：サシバ		○		<ul style="list-style-type: none"> ・夏鳥で、両生類や昆虫類を餌とし、周辺の主に針葉樹に営巣する ・カエル類等の餌が豊富な里山環境に生息する 	・餌場環境と隣接する営巣環境がセットで存在することを指標する	

選定の視点 a. 環境特性を指標する b. 生態系を代表する c. 市民による取組みを促す

表 1-5-1(4) 指標種など

地域区分	主な環境タイプ	選定した種等	選定の視点			生態等	指標・保全へのつながり
			a	b	c		
⑥天竜川中流山地	スギ・ヒノキ植林	鳥類：クマタカ		○		<ul style="list-style-type: none"> ・森林に生息する留鳥で、哺乳類や中型鳥類を餌とし、大径木で営巣する ・良好な餌環境と営巣環境が存在する森林に生息する 	・良好な樹林環境を指標する
	支流河川・溪流	魚類：カジカ	○			<ul style="list-style-type: none"> ・河川上流域の瀬や淵に生息し、浮き石や載り石まわりで見られることが多い ・底質が細泥等で覆われると見られなくなる ・天竜川水系では、ほとんどの川において生息状況は悪いが、気田川の一部の支流には生息密度の高い川もわずかに残されている ・支流の上流域に特徴的な種 	・巨礫の浮き石環境(上流域の河床環境)を指標する
⑦北部山地自然林	自然林	鳥類：アカショウビン	○		○	<ul style="list-style-type: none"> ・夏鳥として渡来し、天竜川上流部の主に落葉樹林に生息し、繁殖する ・昆虫類やカエル類、甲殻類や貝類、魚類等を餌とする ・朽木や崖の土壁等に巣穴を掘る ・奥山の豊かな森林環境に生息する 	・良好な森林環境を指標する
	源流部	魚類：ヤマトイワナ	○			<ul style="list-style-type: none"> ・県内では大井川及び天竜川の本・支流の源流部等に生息する ・盛夏の水温がおよそ 15℃未満の水域に生息し、落下昆虫や流下昆虫を餌とする ・ニッコウイワナ等の放流による駆逐や交雑等の問題が指摘されている 	・森林と森林に涵養される源流部の水環境を指標する
市内全域	市街地	鳥類：ツバメ類			○	<ul style="list-style-type: none"> ・コシアカツバメ、ツバメは人家の軒先等に営巣する ・3月から4月に飛来する夏鳥 ・大量の昆虫類を子育ての餌とし、巣材に泥とわらを使用する ・市民による識別が容易 	・農地等が残存し、餌となる昆虫類が豊富な市街地環境を指標する
	中小河川・細流	昆虫類：ホタル類			○	<ul style="list-style-type: none"> ・幼虫は小河川や水路等の水中に生息する ・幼虫はカワニナ等の貝類を餌とする ・水辺の土中でさなぎになる ・ある程度有機物が含まれる水域に生息する ・市民による識別が容易 	・水質が比較的良好であり、コンクリート化されていない流水域を指標する
	ため池・田んぼ	昆虫類：赤とんぼ類			○	<ul style="list-style-type: none"> ・幼虫期は水中に生息し水生生物を餌とし、成虫は昆虫類を餌とする ・生息環境は種によって異なる ・抽水植物や隣接樹林の有無等により生息する種が異なる 	・多様な水辺環境の存在を指標する

選定の視点 a. 環境特性を指標する b. 生態系を代表する c. 市民による取組みを促す

6 生物多様性モニタリング指標

2013 戦略では、市域の生物多様性の状態がどのように推移しているかを把握するため生物多様性モニタリング指標を設定し、策定後の5年間でモニタリング調査を実施し、初期値を把握しました。

目標達成のために、市域の生物多様性の状態を把握するモニタリング調査は継続していきますが、第1回目の調査の結果等をふまえ、見直しを行った結果は表1-6-1に示すとおりです。防潮堤建設に伴うクロマツ林消失のため当該種を外しましたが、新たに、市民参加の調査をさらに促進するため赤とんぼ類とホタル類、及び専門家調査によるシブカワツツジの3種を追加しました。

表 1-6-1(1) 生物多様性モニタリング指標

【動植物モニタリング指標】

No.	モニタリング指標	地域区分	モニタリング調査方法	指標方向性	現状値（平成28年度時点）
1	カモ類、シギ・チドリ類	②浜名湖・周浜名湖低地	○定点調査 ○調査時期：10～12月 ※越冬のため飛来する時期	個体数の現状維持・増加	【カモ類】 ヒドリガモ、カルガモ、オナガガモ、ホシハジロ、スズガモ 【シギ・チドリ類】 イソシギ
2	アマモ場(アマモ場に生息する魚介類)		○アマモ場に生息するヨウジウオ、タツノオトシゴ、ワレカラ類、ハマグリなどの魚介類の生息状況調査 ○調査時期：6～9月	種類数や個体数の現状維持・増加	【アマモ類】 アマモ密度 37～81（シュート数/0.25㎡） コアマモ密度 55～約420（シュート数/0.25㎡） 【魚介類】 9網19目29科38種
3	ウラギク、ヒヌマイトトンボ		○生息生育状況調査 ○調査時期 ・ウラギク：9～11月※開花時期 ・ヒヌマイトトンボ：5～9月※成虫発生時期	個体数の現状維持・増加	【ウラギク】（H25年度） 大谷川 2,000株程度 葭本川 700株程度 都田川 0株 【ヒヌマイトトンボ】（H25・26年度とも） 成虫 0個体 幼虫（ヤゴ） 0個体
4	ヨシ(ヨシ原)		○ヨシ群落(ヨシ原)の分布範囲の記録 ○調査時期：9月～10月 ※ヨシ生長のピークの時期	分布範囲の現状維持・拡大	みをつくし橋～江大橋の間 ヨシ原の形成を確認
5	ヤリタナゴ、マツカサガイ		○ヤリタナゴ、マツカサガイの個体数、分布範囲の記録 ○調査時期：5～7月 ※産卵期	個体数または生息範囲の現状維持・増加	【ヤリタナゴ】 細江地区 10個体 引佐地区 54個体 【マツカサガイ】 細江地区 42個体 引佐地区 8個体 【その他】 魚類 7目9科19種 確認 底生動物 13目24科28種 確認
6	トウカイタンポポ、セイヨウタンポポ	④三方原台地～扇状地	○ラインセンサス調査 ○調査時期：5月 ※トウカイタンポポは春に開花、セイヨウタンポポは年中開花	個体数割合の現状維持・トウカイタンポポの増加	トウカイタンポポ 32個体 セイヨウタンポポ 61個体 交雑タンポポ 187個体

表 1-6-1(2) 生物多様性モニタリング指標

【動植物モニタリング指標】

No.	モニタリング指標	地域区分	モニタリング調査方法	指標方向性	現状値（平成 28 年度時点）
7	コシアカツバメ、ツバメ	④三方原台地～扇状地	○特定の地域内を歩き、人家の軒先などを観察し、ツバメ類の巣の確認 ○調査時期：5～6 月 ※巣にヒナが見られる時期	巣の数の現状維持・増加	ツバメの巣 33 個 コシアカツバメの巣 0 個
8	ミカワバイケイソウ		○ミカワバイケイソウの生育状況調査 ○調査時期：5～6 月※開花時期	個体数または生育範囲の現状維持・増加	ミカワバイケイソウ 90 個体程度
9	ミクリ類		○ミクリ類の生育状況調査 ○調査時期：7 月 ※ミクリ類の開花・結実時期	生育範囲の現状維持・拡大	新屋径橋～中馬橋 広く生育 中馬橋～新屋橋 なし 新屋橋～内野西橋 点在
10	ホトケドジョウ		○ホトケドジョウの確認調査 ○調査時期：5～10 月	個体数の現状維持・増加	【ホトケドジョウ】 51 個体確認（地点①2 個体、地点②6 個体、地点③43 個体） 【その他】 3 目 5 科 9 種 確認
11	ナゴヤダルマガエル、トノサマガエル	⑤引佐丘陵地～低山地	○ラインセンサス調査 ○調査時期：5～6 月 ※カエル類が良く鳴く早朝から昼にかけての午前中	個体数の現状維持・増加	ナゴヤダルマガエル 27 個体 トノサマガエル 9 個体
12	ゲンジボタル		○特定の地域内の水路などを歩き、ゲンジボタル(成虫)の個体数または生息範囲を記録 ○調査時期：6～7 月 ※成虫の発生時期	個体数または生息範囲の現状維持・増加	ゲンジボタル 22 個体
13	ギフチョウ		○ラインセンサス調査 ○調査時期：4 月 ※成虫の発生時期	個体数の現状維持・増加	ギフチョウ 34 個体 カンアオイ類 941 個体
14	トンボ類、キツツキ類		○ラインセンサス調査、定点調査 ○調査時期：7 月 かわな野外活動センター	個体数または確認例数の現状維持・増加	【キツツキ類】 コゲラ、アオゲラ 【トンボ類】 クロイトトンボ、キイトトンボ 外計 13 種
15	トンボ類、キツツキ類		○ラインセンサス調査、定点調査 ○調査時期：7 月 都田総合公園	個体数または確認例数の現状維持・増加	アオゲラ 1 個体 コゲラ 1 個体 キツツキ類の巣穴を確認
16	ムラサキミミカキグサ、キキョウ		○生育範囲、個体数の記録 ○調査時期：7～9 月 ※ムラサキミミカキグサ及びキキョウの開花時期	個体数の現状維持・増加	ムラサキミミカキグサ 約 550 株 キキョウ 16 株
17	アライグマ（特定外来生物）		○自動撮影装置によるアライグマ生息状況の確認 ○調査時期：通年	確認数（例数）の減少	【H25 年度】 自動撮影装置確認 4 地点/13 地点 痕跡調査確認 4 地点/15 地点 【H26 年度】 自動撮影装置確認 2 地点/10 地点 痕跡調査確認 0 地点/10 地点 【H27 年度】 自動撮影装置確認 0 地点/9 地点 痕跡調査確認 0 地点/9 地点

表 1-6-1 (3) 生物多様性モニタリング指標

【動植物モニタリング指標】

No.	モニタリング指標	地域区分	モニタリング調査方法	指標方向性	現状値（平成 28 年度時点）
18	スギ・ヒノキ植林	⑥天竜川中流山地	○林内の定点写真撮影 ○調査時期：夏季～秋季	下層植生の発達・増加	—
19	クマタカ、ヨタカ、サンコウチョウ		○ラインセンサス調査 ○調査時期：4～9月 ※クマタカは通年生息、ヨタカ、サンコウチョウは夏鳥	生息有無、確認例数の維持・増加	【クマタカ】 定点調査により少数の飛翔、留まりを確認 繁殖を示唆する行動は未観察 【ヨタカ】 夜間ラインセンサス調査により、1回のみさえずりを確認 【サンコウチョウ】 ラインセンサス、定点調査ともに生息確認できず 【その他】 鳥類 8 目 18 科 37 種 確認
20	赤とんぼ類	市域全体	ジオタグ付き写真の投稿による市民参加型調査	個体数の現状維持・増加	—
21	ホタル類		ジオタグ付き写真の投稿による市民参加型調査	個体数の現状維持・増加	—